

〈法話〉

今年まで命をいただきまして報恩講に法話をさせていただくことになりました。これで十四回目かと思えます。来年はとても無理だろうという思いもあったのですが、今年までは何とか健康をたもって皆さんにお目にかかれました。この度は中越地方に大地震がございました四十何人かの方がお亡くなりになりました。家屋がたくさん崩壊して、まだ家に帰れない人が何万人とおられるということをニュースで聞きまして、その御遺族の方々や被害を受けられた方々にお見舞いを申し上げたいと思えます。

報恩講はご承知のとおり、今から約七百三十三年ほど前ですが親鸞聖人の末のお嬢さん覚信尼が夫の小野宮禅念から相続された土地を親鸞聖人の御廟用地として寄進されまして、そこに親鸞聖人の御影を安置する御廟が出来上がったわけであります。その御廟で毎年十一月二十八日に聖人の残されたお言葉を味わって他力の信心をはっきりするための集いが行われてきました。それが覚如上人によって報恩講と名づけられ、本願寺の中心の御仏事となったわけです。それからまた関東では聖人がまだ御存命の時「二十五日の念仏」という法会がありました。それは法然上人のご命日に集って教えを反復して信心をはっきりするための法会でした。親鸞聖人がお亡くなりになりましたからその「二十五日の念仏」という集いが「二十八日の念仏」となり、毎月二十八

日に聖人のお言葉を反復して信心をはつきりさせていただく法会がずっと続いてきたわけであり
ます。これらの二つが、本願寺が出来ましてから報恩講としてこの真宗教団の中心の御仏事とな
ったわけであります。真宗の教団は報恩講教団であると云われるのはその意味でございます。昨
年もお話し上げましたように親鸞聖人ご自身が仏恩を深く喜んでおられる。今日は資料を一部
作って御覧いただきたいしておりますが、ワープロの「報恩講話資料」は真宗の根本聖典『教行信証』
総序のご文でございます。総序のご文をここにあげましたのは親鸞聖人ご自身が如来の恩徳を深
く知ってその御恩報謝のお心ですつと貫いてこられたということがわかる文章でございます。そ
こで皆様方と一緒にこれを拝読してみたいと思います。どうか声を上げて読んでください。

〈資料〉

「ああ、弘誓くげいの強縁ごうえん、多生たしやうにも値もいがたく、真実じゆしんの淨信じゆしん、億劫おつこうにも獲えがたし。たまたま行信ぎやうしんを獲え
ば、遠く宿縁ゆくえんを慶よろこべ。もしまたこのたび疑網ぎもうに覆蔽ふくへいせられれば、かえつてまた曠劫かうこつを徑歴きやうりやくせん。誠
なるかなや、摂取せつしゆ不捨ふしやの真言しんごん、超世ちやうせ希有せけうの正法しやうぽう、聞思もんしして遲慮ちりよすることなかれ。ここに愚禿ぐとく禿くの親鸞しんらん、
慶よろこばしいかな、西蕃せいばん・月支がつしの聖典しやうでん、東夏とうか・日域じちいきの師積ししき、遇あいがたくして今遇あうことを得たり。聞
きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗まそうの教行証ぎやうぎやうしやうを敬信きやうしんして、特に如来にがひの恩徳おんとくの深きことを

知りぬ。ここをもって、聞くところを慶よろこび、獲うるところを嘆なげずるなりと。」(『聖典』一四九頁)

〔語 註〕

- 強縁ぞうじょうえん Ⅱ 凡夫が救われていく強い縁ぞうじょうえん(増上縁)のことで、阿弥陀仏の本願力をいう。
- 多生にも値いがたく Ⅱ いくたび生を重ねても容易にあえるものではなく。
- 億劫 Ⅱ 百千万億劫の略。無限に長い時間をあらわす。
- 疑網に覆蔽せられれば Ⅱ 疑いの心におおわれるならば。
- 径歴 Ⅱ ここでは流転をくり返すこと。
- 摂取不捨 Ⅱ 阿弥陀仏が、念仏の行者を光明のなかにおさめ、救いとして決して捨てないこと。親鸞聖人は、これを阿弥陀仏の意義とする。(『浄土和讃』 勤行集へ赤本一〇二頁上))
- 聞思して… Ⅱ 本願のいわれを聞きひらき、疑いためらつてはならない。
- 西蕃・月支 Ⅱ 現在のインドとパキスタン、アフガニスタンの地域。
- 東夏・日域 Ⅱ 中国と日本。

これは聖典をお持ちの方は見ていただきたいのですが、一四九頁から一五〇頁です。弘誓の強縁とは凡夫が救われていく強い縁ぞうじょうえん(増上縁)のことで、阿弥陀仏の本願力をいう、少しでも分かりやすくするために、資料に註を添えてあります。

私達は聖者ではありません。お釈迦様の弟子の舍利佛しやりぼつとか、目連もくれん、富楼那ふるなとかいうような人とは違いました、普通の生活をしているものです。平たく云えばお金儲けと子育てに一生懸命になっっているようなそういう我々在家の人間が間違ひなく救われる道をはっきりしていただいたのが浄土真宗です。それは我々在家の者ではありません。出家された人もこのことがはっきり分かることによつて済たすかつていく。在家の者も出家した者も全てが済たすかつていく道ですが、ことに我々在家の者、日常世俗のことに振り回されている私達が南無阿弥陀仏という言葉になつた仏に遇つて済たすかつて行くのです。この前あるお寺の御住職さんが「念仏一つで済たすかるといふことがよく分からない。今年の報恩講には念仏一つで済たすかるといふことの意味を話して下さい。」というご要望がありました。第十八願のことを「念仏往生の願」と法然上人は云われております。南無阿弥陀仏という言葉の用はたらきで私たすが済たすかるといふことは、この私達の普通の世界の生活の中で仏の開かれた絶対自由、絶対平等、絶対平和の世界を精神の世界としてはつきりさせていただくことです。世界という地球儀に描いてあるような世界とは違ひ。世界にはいろいろな意味があります。私達がどういふ意味でこの人間の命を生き貫くかといふことについては一人一人が世界観をはつきりしなくてはなりません。芸術家は芸術家としての世界観、哲学者は哲学者として世界観を持ち、政治家は政治家としての世界観を持つのが普通であります。どういふ世界観を通俗的に持つていても、人間には苦しみ悩みがある、その苦しみ悩みを平たく言えば、思うようにしたいが思

うようにならない。思うようにならないからなおさら思うようにしたい。その矛盾のところを苦勞して経廻りながら歳をとっていく。親鸞聖人の御作りになった和讃の中に「生死の苦海ほとりなし」（『聖典』四九〇頁中）というお言葉があります。生死を「シヨウジ」と読みますが、これを「セイシ」と読みますと生きる、死ぬことになりませんが、「シヨウジ」と読んだ場合は、我々が迷いの世界を無自覚に繰り返していることを意味します。幸福追求の生活をしていますが、その幸福追求が出来るように思っても努力はしているが、思うようにならないことが一杯出てきて苦しみながら生きています。そこで貪りの心を起こし、怒りの心を起こし、道理に暗い生活をするだけで一生を終わってしまう。そういう一生は「生死の苦海ほとりなし」。どこで本当の安らぎを得て生きるのか。本当にどこにいったら大満足の出来る生活が出来るのか分からないままに、毎日一生懸命努力している。その努力はけなげなことだが、努力をすることにおいて本当の意味の安らぐ所、落ち着き所、満たされた所、闇が完全に破れていく所が見出せないならば私達の一生涯は流転輪廻です。

曇鸞大師の用いられた喩えで申しますと尺取虫が丸い盆の周囲をぐるぐる回っているようなものです。「蚘蟻循環」といいます。尺取虫が身体全体で力を入れて一生懸命廻っているのですが同じ所をぐるぐる廻っている。そういう喩えです。曇鸞大師は中国の浄土教の祖師であり、聖人は非常にあがめておられます。曇鸞大師の喩えはすばらしく、我々の日常生活を二種類の喩えで表

現しています。今申しました尺取虫が同じ所をぐるぐる廻っているという喩えと、蚕が桑を食べ、繭を作り、自分の家ができたと思つて安心して蛹となつて寝てしまふと、人間が繭を熱湯につけて絹糸をとるといふ喩え。何万年何十年しても蚕は同じ生きかたをしている。蚕は桑を食べ、繭を作り繭の中で寝ては殺されてしまふ。「蚕繭自縛」といふ喩えです。蚕が自分の身を自分で縛つてしまふ。自由に動けない小さな繭を作つて寝てしまふ。その結果、殺されてしまふ。そういうことに気づくことが出来ず何万年も同じことを繰り返している。曇鸞大師がこれらの喩えであらわしている生死とはそういうことです。この世は生死の世界です。また中国の善導大師は貪瞋二河の譬喩を説き、貪りを水の河に喩え、怒りを火の河に喩えています。我々の生活は貪りと怒りの生活であり、貪りと怒りの根には道理に暗い愚痴があります。貪欲・瞋恚・愚痴の三毒の煩惱の中で一番大きな愚痴が根にあります。

私が教えていただきました曾我量深先生は痴は知に病だれがかかっている、不健康な知であると云われました。自分のことは自分で知つていふつもりだが、仏の教えに照らされてみるとこれは自分を中心にした執らわれ心を中心にした不健康な知である。これを愚痴と云う。これを破つていただく用はたらきが本願の用はたらきである。我々を流転から解放をしてくださる用はたらきである。つまり曇鸞大師がお喩えになつておる「蚕繭自縛」とか「蛆螻循環」とか「蜘蛛循環」とかいう同じ所を廻つて出口のない暮らしをしているこの私達に、仏が大慈悲をもつて、目覚めてこの迷いの世界に絶対に落ち込ま

ない精神生活をはつきりさせようという誓願をおこされた。それにはどうしたら良いのか、それは仏の大慈大悲をもって南無阿彌陀仏という言葉を我々に付与する。仏が誓願の根本として南無阿彌陀仏という言葉、それは誰でもいつでも何処でもどんなことが起こった時にでも称えられる言葉であります。それを我々に付与する。南無阿彌陀仏を称えさせて流転から解放させようというのが阿彌陀如来の本願である。ところがそれがなかなか分かりにくいのです。自分は流転していないと思っている。まともな暮らしをしていると誤った自信を持っている。自信があると思いつながら愚痴をこぼし、争いながら暮らしているのが我々人間です。

少し話が変わりますがキリスト教では、人間は動物と神の中間の存在であって、神を信じることによって動物本能の世界から遠くはなれて人間としての尊い信仰生活ができる。こういうことを教えておられるようです。ところが現実はどうかといいますと一方では平和を追求する、民族・国家をこえて平和を追求する。アテネのオリンピックのような平和の祭典が行われますと同時に、片方では核爆弾を作って戦争に備えている。イラクで毎日のように人が殺されている。平和を追求しないわけではないが、一方では戦争がどんどん残虐化している。そういう世界に私達は生きています。自分でこういう世界に生まれたいと思って生まれてきた人はいないのですが、ものごころついてみたらこういう世界にいた。私も今から約六十年前の太平洋戦争時代に兵隊で人殺しの稽古ばかりしていました。丁度骨箱ぐらいの容器に火薬を詰めて、それを抱いて戦車の下に潜

り込み爆発させる。一発で一つの命。つまり今のイラクで自動車に爆薬を積んで自爆するのと同じ。その頃はそんなにたくさん自動車もなく、兵隊一人ひとりが火薬箱を抱いて戦車の下に潜り込む訓練ばかりしていました。敗戦後軍隊から解放されたら世の中がぐんと変わってしまい、今まで考えていたことが全部間に合わなくなってしまう、これからどう生きたらいいのか、どうしたらいいのか分からなくなってしまう自殺寸前のところまでいきました。不思議なご縁で曾我量深先生の教えに遇わせていただき、『歎異抄』の第一条、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつところのおおるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。」(『聖典』六二六頁)このお言葉が私の胸の中に入ってきてくださった。それまで国の為、天皇のため、何々の為とか云って努力する世界しか教え込まれていなかった。生きることの本来の意味を全く教えられないままに、何々の為という所で知識を積み重ね、努力をして立派な者になるというような教育しか受けてなかった。ところがそういう教育の結果、私は国家主義のもとに戦争に参加するようになった。人殺しの稽古ばかりして、満州の奥地まで行きました。戦後非常に悩み苦しみ、その悩みが大きなご縁となって、曾我先生の教えによつて『歎異抄』の第一条が響いてきたわけです。これは何々の為というようなそういう生活ではなく私自身が目覚めて生きる、誰の為に働く、誰のためにする、国のために、家の為にするのではなく私自身がこの世に人間の命をいただいて生れてきたということの根本義(受生の意義)

が領ける世界がある。それを浄土往生という。往生とは死ぬことではありません。困ることでもありません。行き詰まっていたものが行き詰らないような尊い精神生活をさせていただく、そういうことが浄土往生です。つまり仏のみ国に生まれるということです。仏のみ国に生まれるということは何か遠い所に死んでから行くということではなく今自分の精神生活が決まるということで、生きる世界がはつきりするということです。私は戦後まもなくおぼろげながらそれが領けたのです。「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなり」それまで精神生活を全くしないのではなかったが、それは自分の頭で考えた理想主義的な精神生活であって、それが戦争が終わって全部壊れてしまった。ところが戦争が終わって世情が急変しても崩れない世界がある。病気になるって死にかけても崩れない世界。それが浄土という仏のみ光の国であり、それが南無阿弥陀仏という言葉によって内観できる。外に観るのではなく内に観る。内観です。天親菩薩の『浄土論』の中に「観彼世界相かんびせかいそう 勝過三界道しょうがさんがいどう」（『聖典』一三五頁）という言葉があります。彼の世界の相を観ずるといふ「観」といふのは見るということですが、私達が目で見るという普通の見方とは違います。それは内に響いてくるというか内に感ずるといふか、忘れていてもちゃんとその世界に帰ることができる内観の智慧を授かる。それが大事だということをはつきりと自覚するところまでは行っていかなかったが、ただ直感的に、『歎異抄』の第一条はこれだ、これが私の究極の世界だということを感じとったのです。それがどうしてできたのかということとはちよつと

説明できません。曾我先生の教えを聴いて、朝早く起きて、アルバイトの労働に行く前に下宿の天井にこの『歎異抄』の第一条のお言葉が現れてきた。そういうと夢みたいな話といわれるかも知れないが事実です。天井の格子に原稿用紙のように字が書いてあるように現れてきた。それは作り話のようですが、私にとってはそれが大転換でした。曾我先生の教えを聴かなかったならばそんな大転換は私にはなかったのです。これが見えた時ここで生きられるのだ、自殺する必要はないのだと。どれだけ世の中が変わって食べるものが少なく不味い物しかなくても、生きる意味がここにあるのだということが分かったのです。往生ということは私が仏のみ国に生まれるということですが、仏のみ国に生まれるということは死んでから行くのではなく今ここに仏のみ国が私に用はたらきかけて私を包んでくださっている。そういうより他にないのです。私はそういうことを理屈で考えたのではなく内観が始まった。内に観ずる。それから私の真宗門徒としての生活が始まった。非常に長い間苦しみ悩んできたことが今解けた。

『歎異抄』の第一条は十七か十八歳の時に国語の教科書として読んだが、試験のための勉強をしていただけです。これがどういう意味なのか試験でどう答えればよいのかという勉強しかなかった。それが始めて自分のこととして自分の身に沁みてきたのは戦後のその時です。弘誓の強縁とはこういうことだと思います。私にとって本願の意味がここに開けた。得がたいご縁を得させていただいた。それから先生について今までずっと聴聞させてもらっているのです。大学の

講義にもいろいろありまして、先生がノートを去年と同じように読んで講義する先生もいましたが、曾我先生はそうではなかった。何も持たずに真宗聖典一つ持ってこられてそれを頂き、三帰依文をとなえ、終了のベルが鳴っても止められないのです。ベルなんか問題にしていけないのです。ベルが鳴って他の先生がその教室を使わなくてはならないのに曾我先生が止められないので教授も学生も外で待っているのです。そういうことが時々ありました。それくらい一生懸命に私達に真宗の教えを説いて下さった。こういう先生に私は初めてお目にかかりました。教義の説明をする先生は沢山おられたけれど、本当に自分がたすかる道を述べて下さった先生に初めて遇いました。そこから始まって「摂取不捨の利益」ということを納得させていただきました。

摂取不捨の利益とは、暗い思いが私の胸に出てきても、仏のみ光に照らされてそれが破れていく。暗い思いが起きるのは煩惱のせいで起きるのです。他人が私を暗くしているのではないのです。自分の煩惱で思うようにならないと思つて暗くしているのです。その暗い心が仏の用き、つまり南無阿弥陀仏という言葉となった仏が、光となって私を包み私の闇を破つてくださる。それはお前の煩惱だと知らして下さる。『歎異抄』第九条の「死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。」（『聖典』六二一九頁）とあります。日常生活はすべて煩惱生活です。貪りの心、怒りの心、愚痴の心、疑いの心も全て煩惱。何かにつけて煩惱が動いています。じつとしていても忙しいです。仕事があるから忙しいのではなく、じつとしていても煩惱が動くから

忙しい。妄念妄想がいつも心の中をうごいているから落ち着いておれないのです。いつも動いていて寝ても夢を見る。そういう状態から解放される。私は救いの第一はそこだと思います。そんなことは簡単なことだといわれるかもしれませんが、なかなか簡単なことではありません。自分の妄念妄想から解放される。そうしますと今まで障りになっていたことが障りにならないようになる。腹がたつ心がやめられるわけではないです。欲を起す心が止まるわけではないのですが、腹を立てても貪りの心が起こつても煩惱のなせる業だということに気づかせていただいで、行き詰まらないで明るく生きる。それが私の救いの第一歩です。

話は変わりますが、我々が生きているこの世は相対世界です。善があれば悪がある。美しいものがあれば汚いものがある。平和があれば争いがある。勝ちがあれば負けがある。建設があれば破壊がある。この世はそういう相対世界です。今朝のテレビで見たことですが、今度の大地震で苦勞いただいている山古志村では錦鯉を飼っているが、その錦鯉が死んでしまった。地震でどうして錦鯉が死んでしまうのか。地震で池にひびが入って水がぬけたのです。家は壊れるし自分の職業のもとになっていっているものも壊れどうしていいかわからないと云っておられる。テレビに映った所を見ればコンクリートの池の真ん中に大きなひびが入って水が抜けていってしまった。死んだ錦鯉が列んでいる。そんな状態で、命があっただけでも、これからどう生きていいか目途がたたないと大変な苦勞をなさっている。人間世界とは相対世界だと思いました。自分は生きて

いる間、大丈夫だと思っけていても、何時壊れていくか分からない。そういう世界に私達は生きて
いる。生きている間は前向きに生きていかななくてはならない。私も八十一歳になりました。これ
からどれだけ命があるか分かりません。身体が動かなくなっても生々と生きていかななくてはなら
ない。人にお世話になって介護してもらって生きていくことになるかもしれません。体の介護は
してもらっても私の精神は誰も介護してくれません。身体は介護してもらっても私の精神は私が
自分で生々と生きる道を発見しその道を内観しなくてはならない。そういう問題を私は感じざる
を得ないので。それは精神科のお医者さんもありますし、安定剤もあると聞いております。ま
た心療ケアもあると聞いておりますが、薬とかで一時的に苦しみから出られる方法はあるでし
ようが、根本的に自分が生きる、死ぬことがわかっていても明るく生きられるという道を見出す
ということが人生の一番大事な根本問題だと私は思います。

曾我先生にお遇いして摂取不捨の世界を感じとらせていただいたことはありがたいことだと思
っております。これは他に比べるものがないのです。摂取不捨と云うことをもつと易しく云った
ら、今まで障りになつていたことが障りにならなくなる。「障碍することなし」です。腹がたつて
も、欲が起つても、人を疑つても、その心を自分でなくすことは出来ないけれど、ちゃんと南無
阿弥陀仏が私に用いて、それはお前がお前を暗くしているのだと。つまり闇はお前が作つてい
る闇である。そういうことを本当に頷かせていただく。それは時間をかけて頷くのではなく南無阿

弥陀仏の一言で頷く。私が愚かでありました。頭を上げようあげようとしていた私が下げざるをえないようにさせていただく。頭の下がらない愚かさを知らせていただく。摂取不捨とはこういう世界だと思えます。そういうことを私は感じています。

この総序の言葉に「摂取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ」とあります。摂取不捨の真言とは本願を説いてくださっておる『大無量寿経』が摂取不捨の真言。その『大無量寿経』の中にもっとつき詰めていけば南無阿弥陀仏が摂取不捨の真言。この南無阿弥陀仏を名として選びとつてその名の意義として本願を展開して全ての人を救おうという法蔵菩薩の用はたらきを説いてあるのが『大無量寿経』です。本願と本願の意義を説いてくださっている。また我々の上に本願が用はたらきかけてくださって私が救われるという道理が説いてあるのが『大無量寿経』です。摂取不捨の真言、超世希有の正法。超世はこの世を越えているということ。善悪美醜とというような相対世界をはるかに超えている世界から私が呼び覚さまされる。いつも自分の迷いが破れて生きていく道をちゃんと確実に歩んでいける世界がはつきりするのです。摂取不捨の真言とは真言宗の真言とは違います。真実のお言葉。道理に基づいた真実のお言葉。それは「ダールマ」として「法」として我々に用はたらいてきた。

これから話が少し難しくなるかもしれませんが、「法と機」ということがあります。「法」とは道理です。「機」とはこの道理によって目覚めた人間とか、あるいは目覚めようとしている人間。

親鸞聖人は「法」は第十七願の「諸仏称名の願」によって我々に南無阿弥陀仏という言葉が付与されている。「機」というはその南無阿弥陀仏のお用はたらきを深く信ずる我々、これが問題であると親鸞聖人は一生懸命教えられました。本願を疑う心ばかりで生きてきた人間が疑う心が破れていく用はたらきをいただいて、今、信心の生活が出来るようになる。

我々は大体知性を信じる教育を受けています。曾我先生が本能といわれることが理解されていない。宿業は本能なりと云われています。「宿業は本能なるが故に感応道交す。」という言葉を生が諸処に書いていますが、「私が本能と云ったことを分かってくれたのは棟方志功さんだけです」と云っておられました。それほど分かりにくいのです。普通本能とは動物の本能です。食の本能、性の本能、とかいうことを我々は普通考えてきました。ところが曾我先生は我々が人間に生まれたことにおいて、仏の大きな目覚はたらましの用はたらきを、我々が目覚はたらましの用はたらきで救われる用はたらきを深く信ずる力を本能として持って出てきている。説明的に言えば本能は本来能力です。本能とは本来能力として授かって生まれてきている。ところが知性生活の中でその本能を塞ぎとめている。その本来能力が発揮できなくなる生活をしている。ところがそれが破れる時がくる。先ほど話しました。私は自殺寸前になって曾我先生に遇わせていただいたということは、つまり私が長い間私自身を閉じ込めていたその世界が破れる時が来た。先生のおかげで破れる時がきた。曾我先生は善知識の能はマッチ一本だと云われた。マッチ一本とは、ガスのコックを開いても火をつけない

ければ燃えない。ところがマッチ一本すればぱつと燃える。善知識とはつまり求道者の大先輩です。仏法の道を深く信じて生きてこられた大先輩が丁度マッチ一本です。我々はちゃんとガスが出てくるようなもので、本能を持っているのですが、マッチ一本つける先生に遇えなかった。それで本能に火つかなかった。ガスに火がつかかなかった。ところが先生のお陰で自分のいただいたきた本来能力は目覚めた。それを宿善開発という。その世界を知った人は如来の本願の深いいわれをありがたくいただくようになるわけです。ところがその世界が分からないで単に知性だけを磨いて生きていくということだけに集中して師匠にも遇えず「ガスが火でつく」の喩えで示されたようなことが起こらなかつたならばその人は、頭で仏教を理解しても本当に済たすかかっていない。つまり仏教インテリになつていても念仏者にはなつていない。そういう誤りをおかす。

親鸞聖人は「弟子一人ももたず」と云われている。（『歎異抄』第六条『聖典』六二八頁）。私はいくつになつても法然上人の弟子である。決して師匠ではない。一生涯法然上人の教えをいただいて、念仏往生の世界をいよいよ深く明らかにさせていただくのである。「顕浄土真実教行証書類」という『教行信証』の題目がそれを表している。弟子はたくさんいるのだけれど弟子一人も持たず。つまり自分はこの師匠のお陰で目覚めをいただいた。決して弟子を作り、寺を創り宗祖となろうと微塵も思っておられなかつた。その親鸞聖人の教えが今日までずっと伝承されてきた。我々の先祖はこの他力の信心を七百五十年近く親鸞聖人から受け継いできたのです。残念ながら

今日こういう時代になってしまった。清沢先生のお言葉でいいますと、「物欲に迷わされることが多い。世に処する道は閉じる」つまり経済第一主義の社会です。世に処する道は閉じるとは何をしても虚しい。そういう世界に落ちこんでいる。何をしてもろくなことがない。何をしても虚しいというニヒルな世界に落ち込んでしまう。金儲けを上手にする人はすばらしい人だという考え方を持っている人が沢山いますが、一時的に金儲けをして成功したと思われる人もやがてはまた借金を抱えて苦勞する。そういうことにならなくても死んだ時には財産は全部人のものになる。

我々は生きていく本当の意義に目覚める教えを聴かせていただく。目覚めの道を聴かせていただく。それを聞法という。目覚めた生活は浄土の生活です。穢土の中に身体は置いておるが、私の心は浄土にある。「超世の悲願ききしより 我らは生死の凡夫かは 有漏の穢身はかわらねど、本願の深い意味を聴かせていただいた時に我々は単なる迷える凡夫ではなく、ここに本願によって目覚めをいただいた、つまり生死を超えることの出来る人間になる。「有漏の穢身はかわらねど」煩惱の身は変わらなくても「心は浄土に遊ぶなり」。つまり煩惱の身であっても、南無阿彌陀仏が用いて貪欲を起こしたこと、怒りを起こしたことはすべて煩惱の所為であると知らしてくださる。光明に包まれている自分自身だということをいつも知らせていただく。これが念仏往生です。念仏往生とはどういうことですか。念仏してもたすからないのはどういうわけかと質問さ

れる方が各地にいる。それは自身の常識的生活が行き詰まって法に遇わせていただくということがまだ出来ていない状態です。その状態から聞法によって大転換を経験する。それが大事です。これは私が体験主義を主張しているものではありません。宗教体験だけを重んじる体験主義ではないが、聴聞によって回心のきっかけが得られ、そこから新しい念仏者としての生活が始まる。それからずっと生滅を離れた本願の大きな世界を目覚めて生かしていただける。死を恐れる心が起こつてもそれは煩惱の「せい」(所為)だとちゃんと分からせてもらう。こういう世界が他力の信心の世界だと親鸞聖人は教えてくださっているのです。

(休憩)

資料の五行目から、「愚禿釈の親鸞慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇い難くして今遇うことを得たり」。

これはインドとかパキスタンとかアフガニスタンとかいう、そういう地域に仏教のこの聖典がずっと広がって、それが中国に伝わり日本に伝わって阿弥陀如来の本願の深い意義が私のところまで届いていただいた。それは多くの祖師方のご努力によるものである。その聖典に私は遇わせていただくことができました。「聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。」聞くということは単

に音を耳で聞くということとは違いました、本願に疑いが晴れるという、それを聞くという。

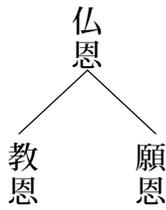
「衆生、仏願の生起・本末を聞いて疑心あることなし。これを「聞」と曰うなり。」（『聖典』二四〇頁）と親鸞聖人が云われておりまして、「聞」というのは話を聞くとかというような具合に普通使われておりますが、親鸞聖人がおっしゃる「聞」ということは、本願の意義が深く納得されて自分が長い間、本願を疑ってきたことに目が覚めて、本願を唯一の依り所として生きるような智慧を授かるということが「聞」ということです。それが、難しい。できないというわけではない。難ということはできないということとは違います。できることなのだけれど、容易ではないということ。有難うございますという言葉があるでしょう。有難いことが今私にあるということ。有難うというのは。サンキュウと違います。容易でないことが私に今実現した。「聞き難くして今聞くことを得たり」というのは、ちよつと普通ではできないことが今本願の大きな力で私に「聞」ができるようになりました。又、その本願の意義と力とを独特の言葉として主体的にあらわして下さった三国の七高僧の方のお言葉を聞かしていただくことができました。聞き難くして聞くことを得たり、遇い難くして遇うことを得たり。その慶びです。こういう言葉が親鸞聖人の『教行信証』の総序にあるということは、どれだけ一生懸命に自分の救われる道を求めてこられたかということです。親鸞聖人の求道の歴史というものがこの「遇い難くして今遇うことを得たり、聞き難くして今すでに聞くことを得たり。」というこの言葉の中につまっているわけです。二十九歳

の時からずっと法然上人の教えを聞いてこられた。又それ以前に比叡山で「堂僧」をしておられた。堂僧と申しますのは「不断念仏衆」と申しまして、源信和尚の伝統のある天台宗の修行で、お内陣の中を右まわりに回って一週間なり一ヶ月なり念仏する、山の念仏といわれる修行です。聖人はその修行をなされ。法然上人に遇われる以前の求道の精神生活も勿論ある。しかし、それでは真の救済は得られず、六角堂に参籠されて聖徳太子の示現によって法然上人に遇われた。『恵信尼消息』第三通（『聖典』六一六頁）その歴史が難の一字であらわされている。聞き難くして今聞くことができ、遇い難くして今遇うことは本当に不思議なご縁である。自分のはからいではなくて、諸仏の大きなお用はたきを一身にいただいて、本願を信ぜざるを得ないようにしていただいた、そういう慶びがこのお言葉の中にあらわれていると思います。

真実の教行証を敬信して、『大経』の教えとその中心の南無阿弥陀仏。その南無阿弥陀仏によって得られるところの私の徹底した他力の救いを敬い信ずる。敬信という言葉を使っておられます。我々の日常生活は大体「敬い」がだんだん失われていく、がさつな生活をしている場合が多いと思います。当然のことだと、一切のことを相対化する。深く頭を下げて敬って聞くというような態度がだんだんなくなってきました。学校で学ぶのもそうだし、家庭生活の中で親子の関係におきましても、敬って教えを聞くとか、敬って学ぶという姿勢がだんだんなくなってきました。自分の頭でわかったつもりになって、自分を教えてくださった先生も職業だというようなところで

相対化してしまう。本当に深く敬って信ずるといような世界は今の時代には珍しいことになってきました。私は親鸞聖人のお言葉によって、自分がだんだん敬いのない生活に落ちてゆくと思ひまして、敬信というお言葉を自分の戒めとしていただいでゆきたいと思っております。なんでも自分の頭でわかって読み取ったのだというようなことで終わってしまえば、ご恩ということを感じない生活になってしまふ。敬って深く信ずるところにご恩を感じていつも自分の愚かさ気がつかせていただいで生きていくという生き方が「敬信」という言葉にあらわれているとは思っています。

特にと書いて「コト」と読みます。「特に如来の恩徳の深きことを知りぬ」。如来の恩徳とは去年の報恩講の時も、お話ししたと思ひますが願恩と教恩ということです。本願のご恩と、その本願の意義を教えていただいた教えの恩ということです。



これを一口に言えばぶつとん仏恩です。

「弥陀の名号となえつつ 信心まことに得るひとは 憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもいあり」(『浄土和讃』『聖典』四七八頁) 仏恩、それは願恩と教恩です。本願のお恵みとその本願の深い意義を教えて、我々を本願に導いて下さった教えの恩、そのもとに願恩がある。教える人も本願によって目覚めた人なのです。その願の恩と教えの恩。恩というのは恵みです。これを深く感ずる憶念の生活をさせていただく。これが「仏恩報ずるおもいあり」です。

我々は欲望生活の中で仏のお恵みを忘れて暮らしている場合が多い。忙しい忙しいと言って一生懸命に働いていると仏のご恩を忘れてしまう場合が多いのですが、南無阿弥陀仏という言葉が用いてくださるお陰で如来の御恩を感銘ふかくいただくかねばならないのだということをいつも新しく知らせていただいて、そこに帰らしていただいて生きていく。忘れないでいつも念じ続けているのはなかなかできないです。身体が調子悪いとなおさらです。痛いところがでくるとその痛いのをどうしたら治せるか、どうしたら痛さから逃れられるか、そういうことばかり考えて、痛いということをしつかけにしてこの如来のご恩を感ずるといふようなことはなかなかできない。私も何十年前か前五十肩をやりまして、なかなか治らない。その頃単車に乗っていたからハンドルが上下動した時、たまらなく痛かった。そういう時に仏のご恩を憶念することができなかつた。このように煩惱の生活の中に大事な仏恩を忘れることがある。しかし、忘れることがあつても、ちゃんと南無阿弥陀仏が私を忘れられないから、私が仏恩を忘れていることに気づか

せて下さる。そういう世界です。清沢先生は資料の中に念ずる時と忘れる時ということがあります。『他力の救済』の中に「我他力の救済を念ずる時は」ということと、「我他力の救済を忘れる時は」という、この「念ずる」と「忘れる」でもって三か条書いてある。

如来の救済、他力の救済を念ずる時は世に処する道が開けるけれども、忘れている時は世に処する道が閉じてしまう。どうしていいかわからなくなる。他力の救済を念ずる時は物欲に迷わされるのが少ない。物欲にまったく迷わされないということは、やはり食べていかななくてはならぬし着てもいかなければならぬから、衣食住の生活をするについては、足らなきやあ欲しい心がおこる。他力の救済を忘れる時は、物欲に迷わされることが多いということは、つまり貪りの暮らしを当然のこととして暮らすということです。それからもうひとつ、「我他力の救済を念ずる時は我が処するところに光明照らし」というのは清沢先生が真っ暗になって暮らしている場合、仏の本願力で光明を感じて闇が破られていくことを体験して生きられるということです。しかし、「他力の救済を忘れる時は我が処するところに黒闇を覆う」どうしていいかわからなくなる。自殺寸前のところに落ち込んでしまうという絶望状態になってしまう。忘れる時が、ややもすると我々にあるけれども、南無阿弥陀仏が用いてくださるから忘れていたものを呼び覚まして、忘れてはいけなと南無阿弥陀仏がいつも私を呼び覚ましてくださる。そういう世界だと私は思います。清沢先生は、これを亡くなる二ヶ月前に書かれた。結核で咯血かっけつばかり。洗面器を傍において

寝ておられた頃書かれた。そして明治三十六年六月六日に亡くなられた。その先生が四月に書かれたものです。ですから、今の健康な我々に比べると条件が比較にならない程悪い、死の直前に書かれたものです。その先生のお言葉の中に「嗚呼他力救済の念は能く我をして迷倒苦悶の娑婆を脱して悟達安樂の浄土に入らしむるが如し。我は実に此の念によりて現に救済されつつあるを感ず。」

「現に救済されつつあるを感ず」というのは摂取不捨の世界、現生正定聚げんしょうじょうじゆで、臨終来迎ではありません。臨終にお迎えがあるというような救いではありません。「現に救済されつつあるを感ず。」それを真宗独特の言葉で言えば、現生正定聚げんしょうじょうじゆとか現生不退です。親鸞聖人が教えられた現生の救済の極致だと私はいただいております。そういうことを我々が感じた時、如来のご恩は何よりも深い、広い、高いご恩であることを感ぜざるを得ません。

おわり

あとがき

本書は平成十六年十月三十一日、第十四回報恩講における櫛暁先生のご法話の記録です。

浄土真宗は報恩講教団と称され、報恩講を勤めることを年中行事で最も大切にしています。それは、宗祖親鸞聖人を偲ぶご法事ということだけではなしに、親鸞聖人が生涯を懸けて明らかにされた本願念仏のみ教えによるご恩への報謝、ということが主眼に勤められます。

先生は本書の中で、「根本的に自分が生きる、死ぬことが分かっているでも明るく生きられるという道を見出すということが人生の一番大事な根本問題」と指摘されています。我々はこの世に誕生したということはいずれ死ぬ「いのち」を頂いたということです。その「いのち」を本当に明るく生きているのかと問われれば、表面だけ明るく、心は暗いというのが本当のところ。対世界の中で、一喜一憂して本当に明るく生きれない。色々な苦しみと悩みを抱え、究極は死という不安と怖れにかられながら生きているのが現実です。先生は「本願の深い意味を聴かせていただいた時に我々は単なる迷える凡夫ではなく、本願によって目覚めをいただき、生死を超えることの人間になる」と教え導いて下さります。親鸞聖人のみ教えを、先生を通して触れさせて頂き、南無阿弥陀仏と念仏申すことによつて「いのち」目覚めて生きる道をご教導賜り、誠に有り得べき勿体ないことと存じます。清沢先生の云われる「現に救済されつつあるを感ず」という、

死んでからの救いではなく、今生における救いというものを味わっていききたいものです。

先生には毎月当寺の会座でのご教化、並びに報恩講のご出講に深謝致します。また、ご多忙の中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様、赤秀品枝様には、お役を快くお引き受け下さり感謝申し上げます。

合掌

平成十七年十月三十日

第十五回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎